

キュリオシティの政治学

吉原ゆかり

文芸・言語学系講師

驚異の部屋

今年のヨーロッパ文化論では、17世紀—18世紀の蒐集文化について講義する予定である。古典古代の彫刻や書物、トルコ原産のチューリップ、ネイティブ・アメリカンの羽飾り、ルネサンスのハイ・アート、オカルト・グッズ、「ジャパン」の陶磁器、東南アジアのスパイス、ペンギンやクロコダイルなどの珍妙奇妙な動植物、などなど、17—18世紀のヨーロッパは蒐めに蒐めた。たとえば、17世紀ロンドンの驚異の部屋「トラデスカントの方舟」のトラデスカント父子。彼らは、ロシア、アルジェ、トルコ、アメリカ、ヨーロッパ大陸を経巡って、珍奇な植物標本を漁った。あるときはアルジェで海賊退治、あるときはカトリックの普遍帝国の脅威に空前の灯火となったプロテスタント教徒救済作戦に水力技術者として参戦。彼らの「方舟」に蒐集された珍品・奇品の数々を見てみよう。

中庭には鯨の肋骨二組…驚異の部屋の内部にはサラマンダー、カメレオン、ペリカン…スコットランドの木に生えた鷺鳥、飛ぶ栗鼠、魚に似た栗鼠、インドの目にも鮮やかな羽毛の鳥、石に変化したもの【化石のこと】、骨にこびりついた人肉…貝殻、人魚の手、ミイラの手、生きてのような蠟製の手、ありとあらゆる種類の宝石、コイン、羽毛で作られた絵画、キリストが磔にされた十字架のかけらひとつ、フランスのアンリ四世とルイ十三世のだまし絵（この絵の真ん中に磨き上げた鋼鉄製鏡を置くと自然な姿が浮かび上がる）、小さな箱に収められた風景のだまし絵…四十二ポンドの重さの人骨、インディアンの弓、象の頭、虎の頭、西インドで処刑に用いられる毒矢——死刑を宣告された人間の背中をこれで切り開き、そのために犯罪者

はそのために死に至る——ユダヤ人が割礼に用いるナイフ…ヴァージニア王のローブ…プラムの種に精妙に刻まれたキリスト受難像…西インドの水中で見つかった、キリスト、マリア、ヨセフの姿が刻まれた石、バッキンガム公からの美しい贈り物で、羽毛に黄金とダイヤモンドが付けれ四大元素を表しているもの…カルル五世が自らを鞭打ったとされる鞭、蛇の骨でできた帽子バンド

現代の目からみれば、人工物と自然物、ホンモノとニセモノ、アートと俗っぽいもののが、隣同士に並べられた、奇妙なことこの上ないごちゃまぜに見える。これを蒙昧の徴であるとか、迷信深さの表れだとかとして切って捨てることは簡単だが、このような、私たちの知のあり方とは異なる分類のしかたを見ることで、私たちの知のありようが、当然でも時間を越えたものでも普遍的なものでもないことがわかるはずだ。

植民地支配とコレクション

見なれぬもの、珍奇なもの、自分とは恐ろしくかけ離れているものへの〈キュリオシティー〉は、一見無邪気な顔をしている。しかし、1492年コロンブスのアメリカ大陸「発見」以来、加速度的に膨

張した西洋世界における文化の蒐集は、植民地支配を通じた、ちなまぐさい〈他者〉の支配と収奪に支えられている。モノ蒐集マニアとは、殺しておいて蒐集し展示する、死物への偏愛でもあるのだ。ディズニーの『ポカホンタス』のネイティヴ・アメリカン、ポカホンタスの父親ポーハタンの貝殻縫い取り鹿皮マントは、ポカホンタスの初恋の人、キャプテン・スミスがイングランドに持ち帰り、友人ジョン・トラDESCANT（父）の驚異の部屋「ジ・アーク」に収蔵される。

美の蒐集と散逸

17世紀初頭のイングランドをヨーロッパのアート・コレクションの国にしたのはアランデル公爵夫妻だが、夫人のベッドは「ジャパン」風。アランデルやチャールズ1世が蒐集した芸術作品は、チャールズが斬首されたピューリタン革命の混乱期、二束三文で売りたたかれ、散逸する。トラDESCANT父子のコレクションは、王党派占星術マニアのアシュモールに合法的にはあるが悪辣極まらないやり方で没収され、これがオックスフォード、アシュモリアン博物館の原型となる。蒐集の物語は、収奪、篡奪、分断、喪失の物語でもある。

チューリップの罪

かわいらしいチューリップだけれど、実はなかなか悪いヤツである。なんでもないチューリップの球根に途方もない値段がつけられ一夜にして暴落、幾多のオランダ市民を破滅させた。これが史上初の泡沫経済チューリップ・バブルである。これを見れば、初期近代のモノの蒐集が、資本の蓄積と表裏一体の関係にあったことがわかるはずだ。

学者先生をからかう

アランデルやトラデスカント父子といったコレクターたちは、同時代人の目にどう映っていただろうか？ ネッド・ウォードの『ロンドン・スパイ』がその一端をかいま見せてくれる。

しばんだ口にパイプをくわえた年寄りの学者がそこにいるのがわかるかい。ついこの間も、ハシバミの実や種用の、小さな懐中迅速実割り皮むき器を考案したばかりなんだ。彼はロイヤル・ソサエティの会員で、長年の間、人一倍熱心に完璧な晴雨計作りに励んでいた。賢者の石を信じ込んで、それを探すために今じゃほとんど乞食同然になってはいるが、いつかクロイソスのような金持

ちになれると信じ、実験室にはロンドンのどの錬金術師より大きなふいごを置いている。彼は、驚くほど骨董品を収集していて、グレシャム・コレッジをしのぐ骨董収納部屋を持っている。彼によれば、エピキュロスの爪楊枝を持っていて食後にいつも使っているそうだよ。アメリカのハチドリ爪からできていて熊手のように使えるから一度に四本の歯を掃除できるらしい。また、ノアの方舟から引き抜いた三インチ釘も持っていて、それは鉄であるにもかかわらず桶の水に放り込むとすいすいと泳ぎだすらしい。

7章. 渡辺孔二監訳. 法政大学出版局
劇作家シャドウエルの『ヴァーチュオーソ』では、水泳の実践ではなく理論を学ぼうと、書齋の机の上で、カエルを師匠に水泳練習に励み、人に羊の血液を輸血してもとは凶暴だった性格を穏和にしてやるマッド・サイエンティストが登場して、さんざんからかわれている。

このような、奇妙なもの、不思議なものに取り憑かれた初期近代の〈キュリオシティ〉の文化史を、こちらら物好き精神いっぱい探っていこうというのが、本講義の目的である。

(よしはらゆかり 英文学専攻)